会-5　歯科大生への「子ども虐待」学生実習の試み ～医科歯科連携教育・臨床への取り組み～

神薗　淳司[1)]，森吉　研輔[1)]，吉岡　泉[2)]，牧　憲司[3)]

北九州市立八幡病院　小児総合医療センター[1)]，九州歯科大学 口腔内科学分野[2)]，
九州歯科大学　口腔機能発達学分野[3)]

【背景】歯科医師は、医師とくに小児科医とともに子ども虐待とネグレクトを早期に発見し、児童相談所等の関連機関との連携を迅速に開始しなければならない。特に、デンタルネグレクトによりう歯、歯周病、およびその他の口腔状態を放置されると、痛み、感染症、さらに機能低下を引き起こす可能性がある。長期間このような環境で過ごした小児は、学習、コミュニケーション、栄養、および正常な成長と発達に必要な活動に悪影響を及ぼすことが知られている。このような背景を子ども虐待診療を担う急性期病院に勤務する小児科医が歯科大生に向けた病院実習を開始した。

【方法】九州歯科大学５年次への講義と５－６年次の北九州市立八幡病院小児総合医療センター内での講義とレポート抽出を課題として病院実習（テーマ：頭頸部外傷・顔面口腔内外傷診療と子ども虐待）を2019年に開始した。本研究は、医療機関情報及び患者の個人情報を匿名加工することによって、患者が特定されないよう配慮した。

【結果】コロナ新時代に突入し病院実習は一次中断しているが、ファカルティディベロップメント（FD）として九州歯科大学の教員向けに報告し、成長発育系における医科歯科連携教育・臨床への取り組みを紹介する。